

WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.98

2016.9.25 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.98 目次

大阪・神奈川野生動物リハビリテーター合同勉強会 ～集え!野生動物の代弁者たち～ の実施報告	2-4
東京環境工科専門学校「油汚染水鳥救護実習」実施報告	5
施設紹介ー京都市動物園野生鳥獣救護センター	6-7
平成 28 年度 油等汚染事故対策水鳥救護研修のご案内	8-9
賀島でアホウドリ繁殖支え 巣立ち見届けず 4 年前他界の獣医師・渡辺さん (東京新聞記事)	10
意外に長い?動物の寿命	11
寄付のお礼	11
事務局日誌	11-12

大阪・神奈川野生動物リハビリテーター合同勉強会 ～集え！野生動物の代弁者たち～ の実施報告

神奈川県野生動物リハビリテーター 井 上 志 香

例年よりも早い梅雨入りとなった平成 28 年 6 月に、「大阪・神奈川野生動物リハビリテーター合同勉強会」を実施しました。実施期間は 6 月 11 日（土）と 12 日（日）の 2 日間で、1 日目は講習会と懇親会を開催し、2 日目は講習会と施設見学を実施しました。勉強会開催の目的は、大阪野生動物リハビリテーターと神奈川県野生動物リハビリテーターとの交流と、傷病鳥獣保護についての現状やリハビリに関する情報の共有、さらに勉強会を通して傷病鳥獣保護への知識を深めることでした。それぞれの参加者数は、11 日はリハビリテーター 14 名、講師 2 名、その他 4 名、懇親会は計 17 名。12 日は、リハビリテーター 14 名、講師 1 名、その他 4 名でした。

2 日間を通し、大阪のリハビリテーター養成事業と実際の活動、神奈川県でのリハビリテーターの成り立ちから活動報告、日本の傷病鳥獣保護施設の現状、動物園での保護施設の状況やミゾゴイの繁殖事例等を、それぞれ講師からお話いただきました。

11 日は、神奈川地球市民センターにて午後 14 時から開始。この日の内容は、「大阪における野生動物リハビリテーターの養成」（講師：中津賞先生、(NPO)野鳥の病院代表・WRV 大阪支部長）を第一部、「国内の野鳥救護事情」（講師：牛根奈々氏、日本獣医生命科学大学学生）を第二部として、合計約 3 時間にわたる講演を実施しました。

まず第一部では、大阪における傷病鳥獣の受け入れ体制の紹介から大阪野生動物リハビリテーターの立ち上げ、そして実際の養成講座の様子が紹介されました。神奈川県のリハビリテーター講習と大きく異なるのが、座学と実習の多さ。さらに、その内容は治療方法など専門性が高いもので、専門職以外のリハビリテーターも、治療内容を熟知したうえで、リハビリケアに当たることができるようにと考えられたプログラムです。



第一部の講演の様子



第二部の講演の様子

第二部では、傷病鳥獣救護活動を行っている日本全国の施設の実情が紹介されました。地域や施設ごとに野生動物に関する考え方が異なることや、継承されているスキルの差異についても言及され、「より効果的な救護を目指した野生動物保護」という行政が掲げる目標との大きなずれを感じざるを得ませんでした。各施設の道具や、給餌法などにも施設間ごとの個性が強いようです。有効なケア方法であっても、「何故それが有効なのか」という原因が解明されたものはあまりなく、また他

施設等にそれが伝えられることは滅多にないとのことでした。

いずれの講演でも、参加者は終始メモを取りつつ真剣に講師の話に集中していました。一連の講演終了ごとに質疑応答の時間を設けていましたが、時間間隔が短かったため配布した質問カードに記入してもらうこととし、後日回答する形式をとりました。

この他、大阪リハビリテーター2名の方から個々の体験も交えた過去の活動について発表していただきました。ツツドリとフクロウの事例が挙げられ、中でもフクロウの放鳥後の追跡調査を試みた事例は、野生で生きていくために必要なケアとは何かという課題を浮き彫りにしつつ、参加者各位には、また新たな知見を得られたものと思われま

す。すべての演題が終了した後、会場を移して横浜駅付近の居酒屋にて懇親会を行いました。和気あいあいとした空気の中で、終始話し声・笑い声の絶えない時間となりました。また、東西のリハビリテーターの間では、それぞれの熱い思いと共に様々な情報交換が行われたようです。

12日は午前9時半に横浜動物園（ゾーラシア）に集合し、講演を3題と園に併設されている動物病院見学を実施しました。計画当初は、繁殖センターでミゾゴイの見学を希望していましたが、ちょうど繁殖時期に入ったため内容を変更し、代わりに飼育担当スタッフさんによるミゾゴイの繁殖についての講演となりました。貴重な画像やエピソードを視聴することができ、大変有意義な内容でした。現在繁殖センターに収容されているミゾゴイは、神奈川県と大阪府で保護された個体で、両地域のリハビリテーターとは浅からぬ関わりがあり、保護個体のその後の状況をつぶさに知ることができました。



2 題目の講演の様子

2 題目の講演は、「神奈川県における野生動物リハビリテーターの養成と期待されるリハビリテーター像」（講師：皆川康雄先生、WRV 神奈川支部長）についてお話しいただきました。自治体制度の違いにより、神奈川県の保護活動について、大阪のリハビリテーターから多くの質問が飛び出しました。その中で、『捕獲許可』を受けることができるようになった経緯については、概要を知るだけで当たり前と見過ごしていたことだけに、どういった経緯で可能となったのかを詳しく聞くことができ、認識を新たにする機会となりました。

昼食後の3題目の講習「猛禽類のトレーニング」（講師：境貴昭先生、大阪野生動物リハビリテーター）では、猛禽のフライトトレーニングについてお話しいただきました。神奈川でも猛禽類が保護されることは少なくありませんが、積極的なフライトトレーニングを経験した人は多くなく、また、その過程を経て放野された個体も少ない状況です。境先生のお話の内容は新鮮なことが多く、また放鳥にかかわるグループを作って、ケージの設置や追跡調査の検討なども行われているとのことでした。

前後しますが、昼食時間を利用して”ランチョンセミナー”と銘打った神奈川県野生動物リハビリテーターの活動紹介を行いました。同じ県内とは言え、活動拠点が異なるとお互いに何をしているのか知らないことが多いので、他のリハビリテーターの活動はどれも興味深い物ばかりでした。横浜市内動物園3園での活動、ドバトに糸が絡まった際の救助、市民からの電話相談対応といった



3 題目の講演の様子



ランチョンセミナーの様子

ケースも出てきて、人と動物の双方に対して真摯な活動の様子が発表されました。短時間での発言だったため、まとめることが難しかったかもしれませんが、今までにない交流の機会となりました。また、こうした事例報告を通じ、現在も手薄になっている救護現場の問題が共有化されました。

最後に病院見学を行い、横浜動物園（ゾーラシア）での傷病救護活動の実際を、病院担当獣医師から詳しく聞くことができました。その中で、「自然界と傷病鳥獣救護との関係は？」、「感情で行動することと理論的に行動すること」など、正解のない問いかけや、「経験を積んだからこそ導き出された答え」も聞くことができました。そのため、短時間でも濃い内容となり、それぞれの胸に強く訴えるものがあつたようで、勉強会終了時に回収したアンケートには、「共感する」と言った感想が多く見られました。



施設見学の様子

以上が 2 日間にわたる合同勉強会の実施内容です。細かな部分は省いていますが、当日から事後処理を行ってみて、この企画を立ち上げた目的は達成できたと実感しています。また、参加された大阪・神奈川それぞれのリハビリテーターの皆様の、今後の活動に向けた新たな『きっかけ』になったなら、それ以上の収穫はないと思っています。準備期間から当日運営にかけて、様々な方の助言・協力をいただきました。文末ではありますが、厚く御礼申し上げます。



東京環境工科専門学校「油汚染水鳥救護実習」実施報告

WRV 事務局 曾根 友希恵

6月と7月に東京環境工科専門学校の2年生を対象に実施された、「油汚染水鳥救護実習」についてご報告いたします。

この実習は、有事の際に、実際に現場で活躍できるような若手の人材を育成することを目的としています。そのため、WRVが環境省から委託を受け実施している「油等汚染事故対策水鳥救護研修」と同等の課程を2日間に渡り実施し、希望者はボランティア登録をすることができ、環境省から正式な登録証が発行されることになっています。

今年度は、実習を行う2日目は2回に分け、下記の内容で行いました。

- 6月3日 13:00～16:30 会場：東京環境工科専門学校
 - ＜講義＞油流出事故の基礎知識と事故対応
 - ＜講義＞油汚染鳥の救護法と救護事例
- 6月17日／7月1日 10:00～16:30 会場：環境省水鳥救護研修センター
 - ＜講義＞水鳥の生態と被害
 - 【実習】油特性実験
 - 【実習】リハビリプール設置
 - 【実習】油汚染鳥の検査、洗浄法

専門学校生にとって、油汚染事故について学ぶ機会はなかなか少ないのですが、事故がなぜ起きるのか、なぜ水鳥に被害がでるのか、重油とはどんなものなのか等を講義と実習を通して学ぶことで、油汚染事故が意外と身近なものであることが伝わったかと思います。また、リハビリプール設置実習や生きたアイガモを用いた洗浄実習の際は、多くの質問も飛び交い、各自熱心に取り組んでいました。実習が全て終わった時には、疲れきった様子ながらも、ある種の達成感からか満足そうな笑顔も見られました。

東京環境工科専門学校は、レンジャーを始めとした自然環境と野生動物保護のプロになるための人材を育成している学校で、全国各地の関係団体に卒業生が在籍しています。今後油等汚染事故が発生した際、汚染鳥の発見者や現場にかけつける立場になる人も多いかと思います。実習で行った内容を一度でも経験をしておくと、実際の事故の際、現場で迅速に作業に取り組めることができ、その点で経験のない人と比べて大きな差が生まれます。本実習を受けた学生が、就職した先で、今回の経験を活かすことができるよう願っております。

最後に、実習にご協力いただいた関係各位に、改めて御礼申し上げます。



【実習】油の特性実験



【実習】油汚染鳥の検査、洗浄法

京都市動物園野生鳥獣救護センター

京都市動物園 種の保存展示課 伊藤 英之

【野生鳥獣救護事業概要】

野生鳥獣救護事業は、昭和 50 年から京都府と京都市が協力して行っています（京都市では京都府から委託を受けて、平成 23 年までは京都府南部、平成 24 年以降は京都市内の救護事業を実施しています）。平成元年 10 月に、京都市動物園野生鳥獣救護センター（以下救護センター）を開所しました。また、平成 21 年度に策定された共汗で作る新「京都市動物園構想」に基づく動物園のリニューアルに伴い、平成 25 年に現在の救護センターを開設し、同年 7 月 1 日より運用を開始しました。

京都府では、野生鳥獣救護事業について、府が鳥獣保護法第 4 条に基づき策定する鳥獣保護事業計画において、正しい鳥獣保護思想の普及啓発に寄与することを目的とした事業と位置付けており、「①希少種の救護を通じて、生物多様性の保全を図る」「②救護活動を通じ、自然・鳥獣保護に関する正しい知識の普及啓発を図る」「③府民の救護への期待に応え、自然・鳥獣保護への関心を高める」ことの 3 つの機能を重要視しています。



新しい救護センターの外観



飼育・処置室

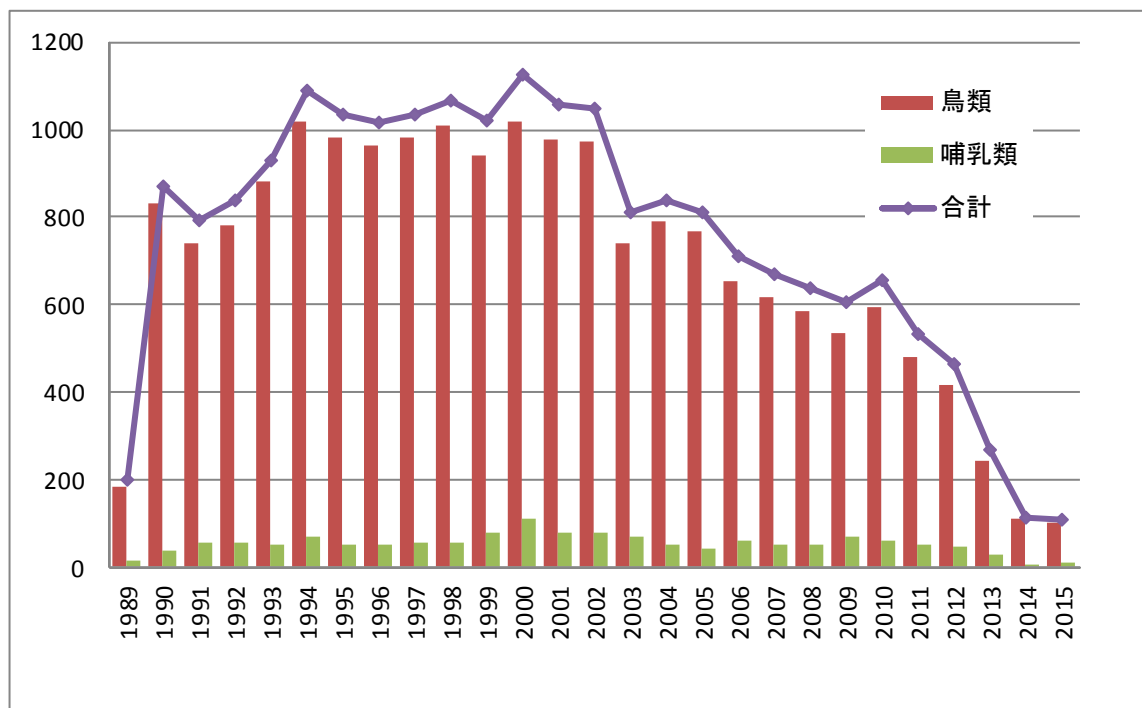


2 階の鳥類用ケージ

【救護実績】

救護センター開設（平成元年）から平成 25 年までは、哺乳類・鳥類（クマなどの猛獣、ペット、家畜、外来生物を除く）を救護の対象としていたため、約 500～1150 件／年の動物を受け入れていました。しかし近年、野生鳥獣による農林被害や生活被害は甚大なものになっており、獣害対策のための個体群管理が行われています。そのため、被害額・件数の多い種（毎年一定数駆除されている種）であるドバト、カラス、ホンダタヌキ、シカ、イノシシなどを救護対象から除外することを盛り込んだ新しい京都府野生鳥獣救護事業ガイドライン（以下、新ガイドライン）が平成 25 年 4 月に策定され、同年 10 月から運用が開始されました。また、新ガイドラインではヒナ・幼獣についても人の手で育てると、野生復帰後の生存が困難となることから救護対象から除外されました。こうした状況から、新ガイドライン運用開始後（平成 25 年 10 月以降）、救護件数は減少し、平成 26 年、27 年度は約 110 件程度の受入れとなっています。

救護動物の内訳は平成 27 年度では哺乳類 4 種 8 件、鳥類 40 種 100 件となっており、鳥類の保護が約 90%を占めています。以前は、哺乳類ではホンダタヌキ、鳥類ではドバト、スズメ、ツバメが救護件数の上位を占めていましたが、新ガイドライン運用後は、哺乳類ではムササビやアブラコウモリ、鳥類ではツバメやメジロが上位を占めています。また、近年は希少種であるハヤブサが毎年救護されています（平成 24 年 1 件、平成 25 年 1 件、平成 26 年 2 件、平成 27 年 2 件）。



図：救護件数の推移

【普及啓発活動】

京都府では救護事業の目的として、鳥獣保護に関する正しい知識の普及啓発を行う機能を重要視しているため、傷病鳥獣受入れの際に、それぞれの救護者へ野生鳥獣との適切な関わり方について詳しい説明を行っています。また、“共汗で作る新「京都市動物園構想」”では、動物園の展示ゾーンの1つである“京都の森”において、救護センターと連携した展示を行うことを飼育展示計画の1つとしており、野生復帰できなかった傷病鳥獣を展示し、これらの動物を通して、野生動物との関わりや地域環境についての啓発活動を進めています。さらに、教育プログラム策定のコンセプトの1つとして、“生と死が実感できる「いのちの教育」の実施”があり、一環として救護活動の報告を行っています。

その他にも講演や動物園ホームページにブログを掲載 (<http://www5.city.kyoto.jp/zoo/rescue>) したり、“京都の森”でのガイドを、動物園のイベントの一つとして行っています。平成 27、28 年度には動物園に来園した小学生を対象にして、エサとして使っているコオロギに関するワークショップを開催しました。また、救護センターでは毎年、2 週間程度の救護実習の受入れを行っており (<http://www5.city.kyoto.jp/zoo/visitor/program/training/rescue>)、多くの学生に傷病鳥獣の飼育、教育普及活動など救護事業に実際に従事してもらっています。



“京都の森”の掲示板



ワークショップの様子



ガイドイベントの様子

平成 28 年度 油等汚染事故対策水鳥救護研修のご案内

WRV 事務局 曾根 友希恵

WRV では環境省より委託を受け、「油等汚染事故対策水鳥救護研修」を例年開催しております。本年度も東京都日野市にある環境省水鳥救護研修センターにて開催する運びとなりましたので、お知らせいたします。

島国である日本の近海では、多くの船が行き交い、食料や物資等を運び、私たちの生活を支えています。それと同時に日本は多くの希少な水鳥の渡来地でもあります。近年、油等汚染事故は毎年のように全国各地で発生しています。洋上で重油が流出する事故が発生し、水鳥の生息域に重なると甚大な被害を及ぼします。1997 年に発生したナホトカ号の事故では、推定約 6,240kl の重油が流出し、1,315 羽もの油汚染鳥が保護収容されました。2000 年に環境省水鳥救護研修センターが開所されてからは、幸いにもこのような大規模な事故は発生していませんが、同様の規模の事故が発生する可能性は十分にあります。そのため、環境省自然環境局では、油等汚染事故などの発生時に、海洋保全と野生生物保護の観点から、迅速かつ的確に対応できるよう「油等汚染事故対策水鳥救護研修」を毎年開催しています。

本研修は、現場での環境保護活動の中心となる国や都道府県の鳥獣保護行政担当者や鳥獣保護センター職員、動物園水族館職員、獣医師、その他水鳥救護に携わる環境保護団体関係者などを対象とし、油等汚染事故の発生メカニズムから、油汚染鳥の救護に関する基本的な知識と技術を習得することを目的として実施しています。油等流出事故の基礎知識、法体系及び事故対策や情報体制の整備、水鳥の生態や油汚染鳥の救護法等について、各分野の専門家により講義と実習の形式で伝授致します。また、研修については現場の状況を勘案し、必要な知識・技術をより効率よく習得していただくために「現場救護リーダー向け」と「鳥獣保護行政担当者向け」とに分け、それぞれ少し異なるカリキュラムにより実施します。

会員の皆さまには、是非、本研修にご参加いただき、そこで学ばれた事を職場における事前準備や実際の事故対応にお役立ていただきたく、よろしくお願い致します。

研修の詳細案内および参加申込み用紙は、環境省水鳥救護研修センターのホームページ、または野生動物救護獣医師協会のホームページからダウンロード可能です。ご質問等がございましたら、環境省水鳥救護研修センターまでお気軽にご連絡ください。

- ・ 環境省水鳥救護研修センター

TEL 042-599-5050

URL <http://www.env.go.jp/nature/choju/effort/oiled-wb/>

- ・ 野生動物救護獣医師協会

URL <http://www.wrvj.org/>



講義風景



アイガモを用いた洗浄実習

平成 28 年度「油等汚染事故対策水鳥救護研修」実施案内

目的：油等汚染事故発生時に、野生鳥獣保護の観点から迅速かつ的確に対応できるよう、油等に汚染された水鳥の救護等に関する共通認識と技術を習得することを目的とする。

日程：第 1 回：現場救護リーダー向け 平成 28 年 10 月 12 日（水）、13 日（木）

第 2 回：現場救護リーダー向け 平成 28 年 11 月 7 日（月）、8 日（火）

第 3 回：鳥獣保護行政担当者向け 平成 29 年 2 月 15 日（水）、16 日（木）

現地研修：開催予定地は岡山県 開催日未定

*現地研修には実習がございません。

現地研修の募集については別途ご案内致します。

内容：以下のような事項に基づき、講義および実習形式で研修を行う。

- ① 油等汚染事故における行政の役割対応
- ② 油等流出事故の基礎知識
- ③ 日本の油等流出事故時の情報体制
- ④ 水鳥の生態
- ⑤ 油汚染鳥の保護法・治療法・洗浄法
- ⑥ その他

*鳥獣保護行政担当者向けと現場救護リーダー向けで内容が若干異なります。

会場：環境省 水鳥救護研修センター研修室

〒191-0041 東京都日野市南平 2-35-2 TEL 042-599-5050 FAX 042-599-5051

HP <http://www.env.go.jp/nature/choju/effort/oiled-wb/>

対象：国・地方自治体の鳥獣行政等職員、鳥獣保護センター等職員、獣医師、
鳥獣保護員、動物園・水族館職員、水鳥救護に携わる関係者等

定員：1 回あたり 30 名（先着順）

*申し込みは各開催日の 2 週間前まで。定員になり次第締め切り。

参加費：無料（参加のための交通費、宿泊費等は自己負担）

申込用紙：別紙

申込先：環境省 水鳥救護研修センター

〒191-0041 東京都日野市南平 2-35-2 TEL 042-599-5050 FAX 042-599-5051

主催：環境省

請負：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会（WRV）

【社会】

鴫島でアホウドリ繁殖支え 巣立ち見届けず4年前他界の獣医師・渡辺さん

2016年6月21日 夕刊

国の特別天然記念物で絶滅危惧種のアホウドリ。先月、小笠原諸島(東京都)の鴫島(むこじま)で生まれたひなが初めて巣立ったが、島の繁殖地づくりに尽力し、志半ばで病死した獣医師の女性がいる。山階(やましな)鳥類研究所(千葉県我孫子市)の協力調査員だった故渡辺ユキさん＝二〇一二年に五十三歳で死去＝だ。ともに保全に取り組んだ研究員らは「きっと巣立ちを喜んでいてくれるだろう」と思いをはせている。(三輪喜人)

渡辺さんは、阿寒(あかん)国際ツルセンター(北海道釧路市)に約六年間勤務し、タンチョウやシマフクロウの保護に携わった。その経験を生かし、アホウドリの繁殖に取り組んだ。「野鳥に対応できる獣医師は少ない。アドバイスは的確で、貴重な存在だった」。山階鳥類研究所の佐藤文男さん(63)は振り返る。

乱獲により激減したアホウドリの繁殖地は現在、伊豆諸島の鳥島と尖閣諸島に限られる。渡辺さんが鳥島でアホウドリの保護に関わり始めたのは一九九九年三月。「一羽のひなも死なせたくない」という強い思いを、佐藤さんは目の当たりにした。

ひなは、崖下約百メートルにある巣から落ちることがたびたびあった。そのままでは死んでしまう。渡辺さんはキャンプから片道二時間かけて現場に通い、ひなを巣に戻す作業を繰り返した。



ヘリで運んできたアホウドリのひなを放す渡辺さん＝2008年2月、鴫島で(山階鳥類研究所提供)



5月、鴫島を巣立ったアホウドリのひな(中央)(山階鳥類研究所提供)

鳥島は火山噴火の恐れがあるため、東京都や環境省などは約三百五十キロ南東の鴫島に別の繁殖地づくりを計画する。五年間でひな七十羽を移住させる繁殖地づくりが、〇八年二月に始まった。

渡辺さんは、ひなを運ぶための木箱を佐藤さんと共同で開発。ひながくちばしをけがしないよう、箱の内側にスポンジを張り、箱の温度調整をするため、開閉できる通気孔も作った。「常にひなの視点で、快適に過ごせるかを考えていた」(佐藤さん)

最初の十羽の移送には直接関わった。鴫島での研究責任者、出口智広さん(42)によると、ひなは神経質で餌をすぐ吐いてしまい、骨格が柔らかいため、下手に触ると骨折してしまう。

渡辺さんは、スルメイカやトビウオを消化しやすいようミンチにして、生クリーム絞り器で注入する方法を研究員らと考案。研究所の広報誌で「皆で検討した方法で、十羽とも健康な状態で運ぶことができ、責任を果たせてたいへんほっとしています」と控えめに振り返っている。

ひなたちは無事に成長し、三年後に鴫島に帰ってきた。最初に戻った雄は、尖閣諸島から来たと思われる雌とペアになり、今年一月、島で初めてのひなが誕生。五月に巣立った。

しかし、渡辺さんは一二年四月に病気で亡くなり、最後まで見届けることはできなかった。

「自分よりもアホウドリが大事という人で、わが子のように接していた」と出口さん。「今回の繁殖成功を一番喜んだと思う。渡辺さんに見せてあげたかった」とその死を惜しんだ。

意外に長い？動物の寿命

植物のうち、特に木本性のものの中には、時として樹齢が数千年にも及ぶ種がいくつも知られています。一方、動物についてはこれまで、例えば絶滅が心配されているゾウガメの仲間や、クジラの中で最も長寿と考えられているホッキョククジラ、北米の洞窟に生息するケイヴ・クレイフィッシュと呼ばれるザリガニの仲間など、特定の種については200年前後の寿命をもつことが知られてきましたが、やはりそのあたりを限界とするのが、一般的な認識であったと思われます。

ところが、最近ではさらに長寿の動物が次々と確認されるようになってきています。その一つが北大西洋に生息しているニシオンデンザメで、体長が最大で6mあまりになるものの、1年間で1cm 程度しか成長せず、長寿が予想されたことから、コペンハーゲン大学のニールセン博士が眼の水晶体を使って放射性炭素年代測定を行ったところ、最大寿命が約400年にも上ることが確認されました(『Science』誌発表)。また、同様に北大西洋海域の沿岸に生息しているアイスランドガイのうち、2006年に捕獲されたものの中から、イギリスのバンガー大学の研究チームによって、改めて年輪の読み取りと放射性炭素年代測定が実施されたところ、中に何と507歳という年齢の個体が含まれていたことが明らかとなりました。この他にも、アイスランド沖で発見されたオオシャコガイの年齢が約400年と推定されたり、さらに、極地の海底に生息している海綿類の中には、1000年～2000年にも及ぶ寿命を持つと考えられる種も確認されるなど、これまでの常識を覆すような研究成果が次々と発表されるようになってきております。

このように、動物種の中にも数百年、あるいはそれ以上の長寿を誇る種がこの地球上には、意外に多く生息している可能性が示されてきたことについては、やはり驚きを禁じえません。ヒトの寿命は、今のところ最長で約120年といったところですが、この世界にはそれよりも遥かに長寿の動物が生息していることに、改めて畏敬の念を持ちたいと思いますが、読者の皆様はいかがでしょう？

(WRV事務局長 箕輪 多津男)



アイスランドガイ (*Arctica islandica*)

〈写真：Bangor University〉

【事務局より寄付のお礼】寄付ご協力者(敬称略)(平成28年6月1日から平成28年8月31日)

○寄付金(一般) 2016.6.28 白倉 豊 5,000 円

○寄付金(神奈川支部) 2016.8.7 野口 友里菜 1,000 円 2016.8.7 山本 拓也 500 円

事務局日誌 2016.6.16～2016.9.15

=== 6月 ===

- | | |
|---|-----------------|
| 17: 東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護実習(環境省水鳥救護研修センター) | 対応: 皆川、箕輪、曾根 |
| 18: 獨協大学総会(椿山荘) | 出席: 新妻 |
| 19: (公社)東京都獣医師会 第5回定時総会(JA 共済ビル) | 出席: 新妻、小松 |
| 20: 環境省水鳥救護研修センター・運営協議会 | 出席: 新妻、大窪、箕輪、曾根 |
| 22: かながわ環境教室(大和市立中央林間小学校)[神奈川支部] | 対応: 皆川 |
| 23: 第73回日本獣医師会 総会(明治記念館) | 出席: 小松 |
| 23: 平成28年度第1回公衆衛生専門技術研修(神奈川県衛生研究所) | 出席: 加藤 |
| 24: 京都市動物園/同野生鳥獣救護センター訪問・視察 | 対応: 箕輪 |
| 25: WRV ニュースレターNo.93 発行 | |
| 25: 東京環境工科専門学校インターン生受入(野生動物ボランティアセンター)[神奈川支部] | 対応: 皆川 |
| 25~26: コウノトリ市民交流会(兵庫県豊岡市) | 出席: 箕輪 |
| 28: WRV事業打合せ(東松山市) | 対応: 新妻、箕輪 |
| 30: 四代目江戸家猫八師匠をおくる会(ホテルニューオータニ) | 出席: 箕輪 |

=== 7月 ===

- | | |
|---------------------------------------|--------------|
| 01: 東京環境工科専門学校・油汚染鳥救護特別実習(水鳥救護研修センター) | 対応: 皆川、箕輪、曾根 |
| 03: 麻布大学麻門会(ベーリンガー川崎) | 出席: 新妻 |
| 04: 帝京科学大学・救護実習: 初期対応(帝京科学大学) | 対応: 箕輪 |
| 05,06: 帝京科学大学・救護実習(帝京科学大学) | 対応: 皆川 |

07: 帝京科学大学・油汚染鳥救護実習 (環境省水鳥救護研修センター)	対応: 皆川、箕輪、曾根
09,10: 災害動物医療研究会・第3回認定VMAT講習会 (福岡)	講師: 羽山、皆川
11: 帝京科学大学・救護実習: 初期対応 (帝京科学大学)	対応: 箕輪
12,13: 帝京科学大学・救護実習 (帝京科学大学)	対応: 皆川
14: 帝京科学大学・油汚染鳥救護実習 (環境省水鳥救護研修センター)	対応: 皆川、箕輪、曾根
15: 練馬区西青色申告会 理事会 (青色申告会大泉事務所)	出席: 新妻、町田
20: 神奈川県鳥獣総合対策協議会シカ対策専門部会 [神奈川支部]	出席: 皆川
20: アライグマ・ハクビシンセミナー (千葉県庁)	対応: 加藤
21: 平成28年度第1回アライグマ防除実施計画検討委員会 (神奈川県自治会館)	出席: 加藤
23: 練馬区獣医師会・足立花火大会	対応: 新妻、倉林、町田
24: 企画展「海の生き物SOS!展」ワークショップ (横浜市立よこはま動物園) [神奈川支部]	対応: 皆川
28: 東京環境工科専門学校インターン生受入 (野生動物ボランティアセンター) [神奈川支部]	対応: 皆川
28: 第31回わいわいサロン (かながわ県民サポートセンター) [神奈川支部]	対応: 皆川
==== 8月 ====	
01: 青色申告会6団体交歓会 (勤労福祉会館)	出席: 新妻、町田
02-06: 神奈川新聞5回連載「川崎のドリトル先生」・日本鳥類保護連盟総裁賞受賞者: 馬場の半生	対応: 馬場、皆川
02: 東京環境工科専門学校インターン生受入 (野生動物ボランティアセンター) [神奈川支部]	対応: 皆川
02: 高校生映像制作協力 (野生動物ボランティアセンター) [神奈川支部]	対応: 皆川
03: 藤沢市協働事業サマースクール (新堀ライブ館) [神奈川支部]	対応: 皆川
04: 事業打合せ ((公財)日本鳥類保護連盟)	対応: 箕輪
07,10-15: 日獣大動物科学科2年実習生受入 (野生動物ボランティアセンター) [神奈川支部]	対応: 皆川
07,10-13: 東京環境工科専門学校インターン生受入 (野生動物ボランティアセンター) [神奈川支部]	対応: 皆川
08: 東京都外来鳥獣(アライグマ・ハクビシン)防除対策検討委員会・第1回作業部会 (東京都庁)	出席: 加藤
08: 神奈川県野生動物リハビリテーター・横浜市立金沢動物園傷病施設見学会 [神奈川支部]	対応: 皆川
09: 神奈川県野生動物リハビリテーター・横浜市立よこはま動物園傷病施設見学会 [神奈川支部]	対応: 皆川
10: 講義・実習等に関する打合せ (日本獣医生命科学大学)	対応: 加藤、箕輪
19: 京都産業大学・学生 施設見学 (環境省水鳥救護研修センター)	対応: 曾根
21: 第5回大阪野生動物リハビリテーター養成講座・第1回講習 (ペピイ動物専門学校) [大阪支部]	対応: 中津
23,24: RISTEX 安全・安心な都市・地域の創造研究開発領域合宿<災害動物医療研究会>	出席: 羽山、皆川
27: 東松山防災フェア (東松山消防署)	対応: 新妻
27~28: 第4回生物の多様性を育む農業国際会議(ICEBA)2016 in おやま (白鷗大学)	出席: 箕輪
31: 日獣大獣医学科・水鳥生態講義 (日獣大)	対応: 加藤、箕輪
==== 9月 ====	
01: 日獣大獣医学科・野鳥救護実習 (水鳥救護研修センター)	対応: 羽山、加藤、皆川、曾根
02: 日獣大獣医学科・水鳥救護実習 (水鳥救護研修センター)	対応: 加藤、皆川、箕輪、曾根
06: 第3回野生動物学教育協議会 (日本大学)	出席: 加藤
06: 「WRV ニュースレター」バックナンバー納本 (国立国会図書館)	対応: 箕輪
08: 第48回獣医疫学会学術集会 (日本大学)	出席: 加藤
08: JEDIC理事会 ((公社)日本海難防止協会)	出席: 箕輪
11: 吉田公一元衆議院議員・旭日重光賞受賞祝賀会 (ホテルカデンツア光が丘)	出席: 新妻

.....

野生動物救護獣医師協会 (ホームページ) <http://www.wrvj.org/> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 98 2016.9.25 発行

発行: 特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局: 〒190-0013 東京都立川市富士見町 1-23-16 富士パークビル 302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人: 新妻 勲夫 編集文責: 小松 泰史 編集担当: 箕輪多津男